慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本博物学史覚え書XV
Sub Title	Notes on natural history in Japan(XV)
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 (The Hiyoshi review of the natural science). No.48 (2010. 9) ,p.59- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20100930-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Hiyoshi Review of Natural Science
Keio University No. 48, 59-79（2010）

日本博物学史覚え書　XV

磯　野　直　秀

Notes on Natural History in Japan（XV）

Naohide Isono

1　『嘉卉園随筆』：知られざる園芸植物書

本書は書名から一般のいわゆる随筆の一つと思われがちだが，じつは詳細でユニークな鑑賞植物書である。執筆年代は明記されていないが，宝暦（1751～63）の初年と伝わる。

著者は横井時敏（トキトシ），宝永７年（1710）年に生まれ，宝暦11年（1761）２月18日に52歳で没した人物である。名は時敏，字有功，号瀛州（エイシユウ）。尾張藩士横井時直の子息で，伯父横井時尚の養子となり，享保15年（1730）に家督（400石）を嗣いで，寄合となる。宝暦８年～10年には，鷹匠頭を努めた。博物方面の師は松平君山（クンザン）［注１］であるが，時敏はとりわけ草花を好み，その集大成として本書『嘉卉（カキ）園随筆』を執筆した。

本書の概要は――

⑴　全８巻，図は無い。草類の鑑賞植物が中心で，木・竹類は除外している。牡丹やツル植物など幾つかの例外はあるが，桜・梅・楓はもとより，ツツジやアジサイ，バラの類も取り上げていない。もちろん，鑑賞品ではないキノコや海藻は対象としない。

⑵　本書の分類は形態・生態・鑑賞部位・用途を組合せた独自の方式で，「陽草・陰草・蔓草・水草・沢草・実草・葉草・薬草・菜蔬・雑草」に分ける。陽草は日向（ヒナタ）を好むもの，陰草は日向を好まないもの，沢草は湿地性の種類，実草は実を鑑賞する種類，葉草は葉を鑑賞する種類で，このような分け方は，それ以前にはもちろん，その後もほかに例を見ない。なお「薬草」までが本論で，「菜蔬・雑草」は付録的な扱いである（表１）。

⑶　形状の似た種類や，名称の似たもの（たとえば，金梅草・銀梅草／虎ノ尾・鷲ノ尾・雉ノ

〒232-0066　横浜市南区六ツ川 3-76-3-D210，慶應義塾大学名誉教授。（76-3-D210，3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.）［Received Feb. 23, 2010］

本稿では，引用文の漢字と仮名に現行字体を用い，濁点・句読点・振仮名を適宜加えた。引用文中の（　）は原注，〈　〉は原本の振仮名，【　】は脱字・送り仮名の補足，［　］は磯野による注・補足である。また，仮名が続くときは品名などに下線を付して読みやすくした場合もある。

尾など）をまとめ，各項のなかでも近似種を取り上げる。表１の「見出し名以外の品」がそれに当たる。

⑷　各項の記文は形態的記述が中心で，繁殖や育成の方法にはあまり触れない。漢名に対応するのが和産のどの植物かについて，先人の説の紹介・批判に筆を割くことが少なくないが，ややくどい感じを受ける。また，渡来植物も取り上げているが，渡来年代などを記すことは稀である。本邦産にしても，何時頃から珍重されはじめたかの記録は乏しい。

⑸　項目数は全654，ほかに一項のなかで名称と特徴を挙げる近似種（花銘などは除く）が166以上あり，したがって取り上げている品数は820を超える。そのうち，本書に初出する名称（あくまで，これまでの調査内での初見という意味だが）が少なくとも80を数える。その一部は前報［注２］に紹介した。

⑹　図を欠くのが本書の最大の欠点である。後年，友人だった鏡島（カガシマ）正英がそれを惜しみ，寛政５年（1793）に『薬草略譜』を出版して113品を図示したが，これは薬草中心で，観賞植物を中心とした本書の意図が反映されているとは言いがたい。

⑺　本書には，「不注」「如圭」の略名がしばしば出る。「不注」は千村伯済（チムラハクサイ）で，生年未詳，宝暦４年（1754）10月12日没，当時50歳未満。名は伯済（伯斎），字延美，通称多門，号華不注山人・水竹居主人。尾張藩士，参政。松平君山に漢学を学び，本草・物産の方面でも教えを受けたと思われる。一方，「如圭」は江村復所で，生没年未詳，享保の頃（1716～35）の人。名は簡易・如圭，字希南，号如亭・復所。摂津尼崎藩の藩儒だが，松岡玄達に本草を学び，『採覧随録』『聚芳帯図左編』などの著作がある。

本書には，興味深い記述が少なからずあり，その数例を以下に挙げる。「　」内が原本の見出し名，（　）に所収巻と現和名，ついで記文中の興味ある記述を記す。

●「文入」（巻１，凡例：見出し名は仮に与えた）

「近年総テ草木ノ白斑白条アル者ヲ樹芸家（ウエキヤ）文入〈フイリ〉ト称ス。古へ，唯翁草（オキナグサ）・鷹羽芒（ススキ）・血筋芒・萱草（カンゾウ）等ニ不過（スギズ）。今諸艸，大半有リ」

斑入（フイリ）品への関心は享保年間の初期から見られるが，「フイリ」の用語はこれが初見か。

●「日輪草」（巻１，ヒマワリ：以下見出し名は原本どおり）

「此者，茎心日ニ向テ旦（アシタ）ニ東・夕ニ西ニ転ズ。将ニ花ヲ放（ヒラカ）ントスル時ヨリ，重クシテ転ゼズ，常ニ東ニ向フ」

『日本大百科全書』（小学館）に記す最近の知見では，「ヒマワリはツボミの間，太陽の方向に花首を向け，夜の間に西から東へ向きを変える（昼間と逆に動いて元に戻る）。この運動は花弁が黄色く色づくころから鈍り，開花後，多くは東を向いたまま動かなくなる」。『嘉卉園随筆』の記述はまさにそのとおりで，この知見を２世紀半ほど先取りしていたことになる。

表１　『嘉卉園随筆』の構成*

巻次	分類	見出し名の品	見出し名以外の品	品数合計	巻次	分類	見出し名の品	見出し名以外の品	品数合計
1	陽草上	94	26	120	5	葉草	73	8	81
2	陽草下	93	18	111	6	薬草上	73	42	115
3	陰草	105	19	124	7	薬草下	69	36	105
4	蔓草	22	6	28	8	菜蔬	45	3	48
	水草	15	3	18		雑草	39	1	40
	沢草	12	3	15		総計	654	166	820
	実草	14	1	15					

*「見出し名以外の品」は，その項の本文に採録された近似種（花銘は除外）。

●「鳳仙花」（巻２，ホウセンカ）

「此者，指甲ヲ染ル‥‥近年，女子ノ爪紅ト云コト止テ，知ルヒトモナシ。予ガ幼年ノ比迄（コロ）。古風ノ女子ハ爪紅ヲ用ヒシ也。鳳仙花ヲ用ルコト，五十年来以前，専（モツパラ）アリシコト也ト，予ガ亡母語レリ」：民俗学的に興味深い記述であるが，尾張以外の土地ではどうだったのか。

●「熊谷草」（巻３，クマガイソウ）

「東武ニテ布袋（ホテイ）草ト云。［江戸では］此辺［尾張］ノ布袋草ヲ座禅草ト云。熊谷草ハ敦盛（アツモリ）草ノ白花ヲ云，誤リ也。東武ノ花肆ノ名ヅクル者，古名ヲ改ル者多シ」：尾張と江戸で呼称が異なる場合が少なからずあったらしく，他にも大同小異の記述が見える。注意を要する点である。

●「楓葉草」（巻３，モミジハグマ）

「葉ハ楓葉ニ似テ，欠刻深ク，茎長シテ，三四葉一処ニ着ク。葉心，細茎ヲ抽テ尺余。八月白花，穂ヲナス。蕾細（ホソク），筆頭ノ如ク，十余花相連リ，一花，小筒子花三箇聚テ一花ヲナシ，一筒子毎ニ細弁五葩アリ」。この文で，「抽テ」は「伸ばして」，「筒子花」はキク類の筒状花，「葩」は花弁。モミジハグマはキク科で，下線部は『牧野新日本植物図鑑』の記述「頭花には３個の管状小花があり，花冠は５裂して反曲」と，見事に対応している。

●「箱根艸」（巻５，ハコネソウ）

水谷豊文や大窪昌章などの尾張の博物家は，羊歯ヌリトラノオをしばしば「ヘンネレス」と呼ぶ。このヘンネレスという洋名が何に由来するか長いあいだわからなかったが，ようやく『園芸大辞典』［注３］の「アディアンタム属（くじゃくしだ属）24はこねしだ」項の牧野富太郎補記で，「ケンペルはハコネシダをホウライシダ Adiantum capillus-veneris と間違えていた。そこで，ハコネシダを「カッペレ草」（capillus の訛），「ヘンネレス」（veneris の訛）とも呼ぶ誤りが生じた」旨の記述に出会った。確かに『嘉卉園随筆』の「箱根艸」異名の記述には，「蛮名，カツテイラ，又ヘンネレス，或ハカツペレソウ」と記されている。

ところが，約半世紀後の水谷豊文著『物品識名』［注４］では，「ハコネソウ」の項には洋名

がまったく挙げられておらず，一方，ヌリトラノヲの項には「ヘンネレス」の異名が記されている。つまり，少なくとも名古屋では，その半世紀のあいだに「ヘンネレス」の名称がハコネソウからヌリトラノオに移ったことは間違いないが，そうなった経緯はまだ明らかになっていない。

［注１］松平君山は元禄10年（1697）３月27日生，名は秀雲，字士竜，通称太郎右衛門，号君山ほか。天明３年（1783）４月18日没，年87。尾張藩士千村（ちむら）秀信の子で，同藩士松平久忠の養子，尾張藩の藩儒。馬廻組を経て書物奉行となる。尾張の本草・博物誌の開祖の一人。門下に，上記の横井時敏のほか，水谷覚夢（水谷豊文の父）・大河内重昌（大河内存真の祖父）などがいる。その方面の著作に『本草正譌』がある。

［注２］磯野直秀，資料別・草木名初見リスト，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，45号。

［注３］園芸大辞典，石井勇義，誠文堂新光社。

［注４］水谷豊文，『物品識名』，青史社。

２　『唐船持渡植物写生図』

前報［注１］で2009年に長谷川仁（ヒトシ）先生の旧蔵書を調べたことを記したが，表記の資料も長谷川旧蔵書の一つで，転写本。取り上げられているのは唐船が持ち込んだ草木で，次のように，唐船の十二支番号・品名（漢名）・数量・大きさなどが記され，原本では図が添えられていたらしいが，この転写本では図をすべて省き，記載文も簡略化されている。

「子四番船持渡　茉莉花　弐株之内壱株

但，高サ凡五六尺迄ニ相成申候由

高サ弐尺弐歩程

横差渡壱尺七寸六歩程

此処にて廻り壱寸

如斯（コノゴトク），花咲申候。尤気候順宜，木情健ニ栄候‥‥（記文，以下略）」

著者名は無いが，記載内容から長崎の幕府薬園関係者の可能性が高い。

本書の執筆年は記されていないが，申18番船が持ち渡った「蕤核（ズイカク）」に「此図三枚‥‥周防守様迄差上」とある。長崎奉行で周防守は三宅大学（在任，享保11～17年）の一人だけなので，この「申」は享保13年（1728）と思われ，唐船に付された十二支から本資料は享保５年～15年（1720～25）頃に作成されたと推定される。これは将軍吉宗が薬材自給政策の一環として，海外種の調査を進めていた時期に当たる。おそらく，長崎に来航する商船に命じて，漢品を持ち渡らせていたのであろう。

以下，次頁の表２に要点を略記する。原資料には和名がまったく記されていないが，メモの後半に転写者が同定した現和名・学名の一覧があり，表に記した和名はその同定による。

表２　享保５～15年に唐船が持ち渡った草木

推定年 船番号	記載品名・数量 【表下の注】	記事（主要な部分のみ）	同定品名
●享保５年			
子４番船	茉莉花　２株		モウリンカ
子31番船	三七草	「御薬園ニ植置候様，丑五月十二日被仰下（オオセクダサル）」	サンシチ
子31番船	何首烏（カシウ）苗【１】	「御薬園ニ植置候様，丑五月十六日被仰下」	ツルドクダミ
子36番船	土茯苓苗	「枯申候」	サンキライ類
子36番船	梹榔樹【２】	「枯申候」	ビンロウ
子36番船	白附子苗	「押葉茎根差上候様，丑五月十二日被仰下」	トリカブト類
●享保６年			
丑７番船	西蕃蓮２株【３】	「出所，江南」	トケイソウ
丑７番船	僧鞋菊　１株	「出所，福建」	？
丑７番船	木本茉莉　１株	「出所，浙江」	？
丑26番船	楓樹　６本【４】		トウカエデ
●享保７年			
寅11番船	常山苗　２株【５】		アジサイ類
●享保８年			
卯８番船	木綿樹苗　１本	「出所，交趾（コーチン）」	キワタ
卯15番船	龍眼樹　２株		リュウガン
●享保９年			
辰５番船	扶桑花　２株	「出所，江南」	ブッソウゲ
●享保10年			
巳９番船	夾竹桃　２本	「出所，南京」	キョウチクトウ
●享保13年			
申18番船	蕤核【６】	「此図三枚‥‥伺ニ周防守様迄差上」	ズイカク（バラ）
●享保15年			
戌20番船	荔枝樹　１株		レイシ
戌20番船	龍眼樹　１株		リュウガン

（表注）これ以下は，転写資料の十二支表示を欠き，年がわからないので表に入れなかったが，「荔枝（２株，７株），肉桂樹（４株），楓樹（カエデ：トウカエデではない），附子苗（トリカブト類），常山苗（アジサイ類）」などの品名が記されている。

【1】『植物渡来考』［注２］に「享保五年何首烏長崎に来る」と記すのに一致する。

【2】『植物渡来考』に「享保五年長崎に来る」と記すのに一致する。

【3】『植物渡来考』に「享保六年長崎に来りし記録あり」と記すのに一致する。

【4】染井の花戸伊藤伊兵衛は，享保12年（1727）に将軍吉宗からトウカエデを拝領したが，これは享保６年に渡来したトウカエデの可能性が高い。

【5】『植物渡来考』に「常山‥‥享保七寅年，長崎に生木来る」とあるのに一致する。

【6】薤核＝ズイカク Prinsepia uniflora，バラ科。薤核の初見は，これまで『物類品隲』（1759刊，注３）とされてきたが，それより30年ほど前に渡来していたことになる。岩崎灌園著『本草図譜』（1830 ～ 44）の巻87に，薤核は「漢種のもの，長崎の官園にあり。樹の高さ五六尺云々」と記すが，この折の渡来品，またはその子孫か。

［注１］磯野直秀・田中 誠，嘗百社とその周辺，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，47号。
［注２］白井光太郎，『植物渡来考』，岡書院。
［注３］平賀源内，『物類品隲』，平賀源内全集，名著刊行会。

３　『難波新花』

これも，前節冒頭に記した長谷川旧蔵書の一つで，『国書総目録』にも未収録の新出園芸書である。本書は，筆跡から長谷川先生が師事した矢野宗幹（ムネモト）先生が転写したものだが，「著者は松風軒，享保14年（1729）の執筆」とわかるだけで，底本の所在は不明。著者の本名も未詳だが，「大坂へ来ル」との記載が数回出るので，大坂の人か。

本文はそれぞれ品名に短い記文を添え，無彩の略図を伴う場合もある。ユリやツバキなどはまとめて記されている。

本資料は長谷川旧蔵書中の２カ所に分かれて存在していた。一つは「難波新花」と題した袋に収められていたもので，半紙45丁に163品（うち39品は図あり）を記す。他の一つは「草花名・抜書集」（仮称）中の原稿用紙10枚に記した56品（すべて図なし）であり，併せて219品（39図）となる。重複は無い。また，梅・椿・蘇鉄以外は草類である。

数が多いのは，百合類34（スカシユリが多い），松本17，オランダナデシコ69など。注目されるのは，①ナデシコの類が多いこと，②「鷹羽蘭」「さらさおもと」「白葉蘇鉄」など，数は少ないが，斑入（フイリ）や白化品などへの関心が見られること，③朝鮮から対馬経由で渡来した園芸品が数点挙げられている点などである。

４　『草花名寄帳』

前節で記した長谷川旧蔵書の「難波新花」袋と「草花名・抜書集」には，『難波新花』以外に『草花名寄帳』と題した園芸書の写しも数多く入っていた。これも今まで耳にしたことがない書名だったが，小笠原亮軒氏の雑花（ソウカ）園文庫に稿本らしい『草花名寄帳』が所蔵されていたので，それのコピーを頂戴して調べてみた。

雑花園文庫本は大福帳式の横長の本で，表紙には「享保十壱午のとし／草花名寄帳／卯花月上旬　仙志」，また本文末尾には「右之通，大坂より来る‥‥花人　仙志」と記されている。つまり，仙志という人物が筆者で，享保11年（1726）４月上旬に成稿したと思われる。序や跋，凡例，目次などは無く，いきなり本文で始まる。その本文は『難波新花』と同じく，品名と短い記文から成るが，図は一つも無い。各品の価格を記すのが特徴で，筆者は植木屋らしい。

品数は総計280，そのうちの最高価格は「極上雪白千重風車」の２両，ついで「唐あじさい」

の１両である。品数の多いのは，カキツバタの６品，桔梗６，松本仙翁19，草藤10，オランダ石竹６，撫子14，ホトトギス５，唐蓮８で，『難波新花』と同じく，ナデシコ類が目立ち，この頃の上方での流行を示唆する。また，ハナショウブ（原記載名，花しやうぶ）も13品挙げられており，花菖蒲が享保の頃すでに園芸品化していたことが明らかである。

5　伊勢の交友社

前報［注１］で嘗百社の歩みを略説し，明治期に交友社と合併したことを記したが，交友社の詳細には触れなかったので，ここに概略を述べておきたい［注２］。

交友社の中軸は丹波修治であった。丹波（ニワ）は文政11年（1828）６月15日に尾張で木村和平の次男として誕生，名は公憲，通称修治，字之翰，号退翁・菅屋・清風。弘化３年（1846），伊藤圭介に入門，嘗百社にも加わる。嘉永元年（1848）に伊勢国朝明（アサケ）郡の医師丹羽（ニワ）衛門［注３］の養子となり，修治の代に姓を「丹波（ニワ）」と改めた。明治41年（1908）12月12日没，年81。

嘉永年間（1848～53），丹波修治は桑名藩士梅沢録介・万古焼（バンコヤキ）陶工の森 有節らと「日新物産会」を設けた。この会は博物・物産同好者の集まりで，幕末期に発展した。そして，丹波修治・鎌井松石・岡田正堅など，日新物産会につながる人々が，明治15年（1882）５月に桑名交友社を結成し，同年７月２日に桑名の浄土寺で第１回博物会を開催した［注２文献 AC：表３］。名称はのち「北勢交友社」に変わる。活動が北伊勢一帯に広がったのであろう。

一方，名古屋では嘗百社が存続していたが，幕末期の中核だった伊藤圭介とその弟子田中芳男が東京に去り，江戸時代の華々しい活動は消え去っていた。そこで，伊勢の交友社との合併話が持ち上がって，明治22年（1889）３月20日に「北勢嘗百交友社」としての統合が決まり，同年８月１日には伊藤錦窠（キンカ）先生招聘博物談話会の席上で正式に合併したらしい。合併に至る経緯は不明だが，丹波修治と親交があった田中芳男［注４］が仲介したのではないか。

その後は嘗百交友社の名で博物会が続く（表３）が，現存記録は明治35年11月９日の第31回で途絶える。おそらく，これが最後の集会だったと思われる。

［注１］磯野直秀・田中 誠，尾張の嘗百社とその周辺，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，47号。

［注２］本節の記述には，下記の文献を用いた。

A 「交友社創始沿革」，『錦窠翁九十賀寿博物会誌』，上巻。

B 『交友社博物会出品目録』，東大総合図書館蔵，A40–50：活版目録19点を合冊。

C 『丹波修治先生伝』，浅井平一郎，：河村典久氏作成ワープロ翻刻版を利用した。

D 『近世伊勢における本草学者の研究』，松島 博，講談社：416頁。

E 『錦窠翁九十賀寿博物会誌』，上巻，「広告」「会則」。

［注３］丹羽衛門（修平）の実兄松斎は，水谷豊文の門下であった。

［注４］田中芳男は丹波修治と同じく伊藤圭介の門下で，兄弟弟子。

表３　交友社博物会の記録：資料記号は前頁注２参照。

博物会の名称など	回数	年月日（明治）	開催地など	資料
交友社の創設		明治15年5月	丹波修治・岡田正堅・瀬木耕一郎・鎌井松石により創設	A
桑名交友社博物会	第１回	15年７月２日	桑名清水町浄土寺	C
〃	第２回	15年10月29日	桑名清水町浄土寺	C
〃	第３回	16年８月26日	桑名清水町浄土寺	B
〃	第４回	17年５月11日	桑名清水町浄土寺	B
〃	第５回	17年11月９日	桑名清水町浄土寺	B
〃	—	17年12月７日	員弁郡南大社村石垣氏：追加会	B
北勢交友社博物会	第６回	18年５月３日	桑名清水町浄土寺	B
〃	第７回	18年10月25日	桑名清水町浄土寺	B
〃	第８回	19年５月１～３日	菰野村菰野小学校	B
〃	第９回	19年10月17日	桑名寺町輪崇寺	B
〃	第10回	20年４月10日	桑名清水町浄土寺	B
〃	第11回	20年10月２日	桑名清水町浄土寺：薬物博物会	B
〃	第12回	21年４月29日	桑名清水町浄土寺	B
〃	第13回	21年11月25日	桑名清水町浄土寺	B
嘗百社・交友社合併決定		22年３月20日		D
北勢交友社博物会	第14回	22年５月26日	桑名清水町浄土寺	B
北勢嘗百交友社伊藤錦窠先生招聘博物談話会		22年８月１日	桑名船場町船津屋眺憩楼（この日，正式に合併成立か）	B
北勢嘗百交友社博物会	第15回	22年12月１日	朝明郡朝日村小向・森 有節宅	B
〃	第16回	23年３月２日	桑名清水町浄土寺	B
〃	第17回	23年９月21日	桑名鍋屋町久末楼	B
〃	第18回	24年４月19日	員弁郡大泉原真養寺	C
〃	第19回	24年11月15日	朝明郡八郷村覚王寺	C
錦窠翁九十賀寿博物会 *		25年７月５・６日	名古屋市門前町博物館	E
北勢嘗百交友社博物会	第20回	25年７月10・11日	菰野村菰野小学校	C
〃	第21回	25年10月22日	桑名清水町浄土寺	C
〃	第22回	26年５月14日	桑名清水町浄土寺	C
〃	第23回	26年12月３日	桑名伝馬町寿量寺	C
〃	第24回	27年５月13日	桑名矢田善西寺	C
〃	第25回	27年12月９日	桑名清水町浄土寺	C
〃	第26回	28年12月８日	桑名清水町浄土寺	C
〃	第27回	29年６月21日	員弁郡阿下喜西念寺	C
三重県嘗百交友社博物会	第28回	32年11月19日	三重郡八郷村覚王寺	B
〃	第29回	33年６月30日	三重県第二中学校（富田中学校）	B
〃	第30回	33年11月３日	三重郡大矢知村興譲尋常小学校	B
〃？	第31回	35年11月９日	三重郡富田村正泉寺	C

* このときは，それぞれ「嘗百社」「交友社」の単独名で参加している。

6　『衆鱗図』に描かれた海産無脊椎動物

讃岐高松藩主の松平頼恭（ヨリタカ）侯（1711～71）編『衆鱗図』4帖［注1］は写実的で美麗な図から成るので名高いが，海産無脊椎動物に多くの紙数を割いていることはあまり知られていない。その内訳は，クラゲ15，花虫類1，タコ4，イカ6，アメフラシ3，ウミウシほか9，エビ58，カニ52，ウミシダ1，ヒトデ7，クモヒトデ2，ウニ1，ナマコ3，計162品。貝類が皆無のほか，イソギンチャク，ヒラムシ，ゴカイ，ホヤの類は描かれていないが，貝類以外の海産無脊椎動物がこれだけまとまって，しかも写実的な図として提示されたのは日本で最初であり，以後も幕末まで例が無い。

幸い，『衆鱗図』全帖のカラー影印本と全品を同定した研究編が近年出版された［注2］。また，『衆鱗図』に先立って作成され，宝暦12年（1762）に頼恭侯から第10代将軍家治に献上された『衆鱗手鑑』の原本あるいは精巧な転写本の残欠が，コロンビア大学と東大三崎臨海実験所に存在することが2007年に判明し，コロンビア大の資料にもナマコやウミウシが描かれていることがわかった［三崎本に無脊椎動物は無い：注3］。

そこで，『衆鱗図』に描かれた無脊椎動物の種類を紹介しておきたい。ただし，エビとカニは数が多いので別の機会に譲り，それ以外のもので『衆鱗図・研究編』（➡注2）において現和名が同定されている場合に限る。

以下，グループ別に示すが，①最初の片仮名は現和名，（　）内は原記載名，「札欠」は『衆鱗図』で名札が無い場合，②グループ内での配列は，現和名の五十音順とする，③現和名に波線を付したのは『衆鱗手鑑残欠』コロンビア大学本にも同図が描かれている種類である。『手鑑』の原記載名は『衆鱗図』と異なる場合もあるが，本稿では後者の名だけを挙げた。

クラゲ類：刺胞動物――アカクラゲ（春海月（クラゲ）），アンドンクラゲ（マスクラゲ），エビクラゲ（鼓海月），カギノテクラゲ（札欠），カミクラゲ（別種クラゲ），ヒクラゲ（ヒ海月），ビゼンクラゲ（ハンド海月），ミズクラゲ（四目海月），ユウレイクラゲ（ウドン海月）／有櫛動物――ウリクラゲ（札欠）

花虫類：ウミサボテン（札欠）

イカ類：アオリイカ（烏賊），ケンサキイカ（ヤリイカ），コウイカ（船頭烏賊，タチイカ），ジンドウイカ（スルメイカ），シリヤケイカ（尻ヤケ烏賊），ミミイカ（チッコイカ）

タコ類：イイダコ（飯鱆（タコ）），スナダコ（赤鱆，砂ツカミ），テナガダコ（手長鱆），マダコ（鱆）

アメフラシ類：アマクサアメフラシ（別種牛魚），アメフラシ（牛魚），フレリトゲアメフラシ（ドウド魚）

ウミウシ類：アオウミウシ（札欠），クロシタナシウミウシ（別種ドウド魚），コモンウミウシ（札欠），ヒメメリベ（札欠）

ウミシダ類：トラフウミシダ（札欠）

ヒトデ類：イトマキヒトデ（札欠），ヌノメイトマキヒトデ（札欠），マヒトデ（札欠），モミジガイ（札欠）

クモヒトデ類：ナガトゲクモヒトデ（札欠），ニホンクモヒトデ（札欠）
ウニ類：ヨツアナカシパン（札欠）
ナマコ類：マナマコ（海鼠）

上記の種類で『衆鱗図』以前に図があるのは，『大和本草』（1709刊）のイトマキヒトデ（海燕），通称『享保元文産物帳』（1735～38，注４）のミズクラゲ（いら：薩摩），アメフラシ（いねつぼ：紀州／べこ：隠岐），イトマキヒトデ（おふじのせなかあて：盛岡），モミジガイ（わくのて：越中／このかす：筑前），『日東魚譜』元文元年（1736）本のアオリイカ，イイダコ，マナマコ，くらいである。これら以外の種類は『衆鱗図』がおそらく初出である。

なお，『衆鱗手鑑残欠』コロンビア大学本には，カツオノカンムリ（原記載「鰹ノ冠」：クラゲの一種）とオカメブンブク（原記載「無名」：ウニの一種）の裸殻が描かれている。この２種は『衆鱗図』には含まれていないが，間違いなく初出である。

［注１］磯野直秀，『衆鱗図』と栗本丹洲の魚介図，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，15号。
［注２］香川県歴史博物館編『衆鱗図』（帖１～４）・『衆鱗図・研究編』，香川県歴史博物館友の会博物図譜刊行会。
［注３］磯野直秀，『衆鱗手鑑残欠』の出現，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，19号。
［注４］盛永俊太郎・安田健編，『享保・元文諸国産物帳』，巻１～21，科学書院。
この産物帳には，図は無いが現和名につながる名称も数多く示されている。参考のため，以下に一部を紹介する。ただし，上出の記載名とカニ・エビ・貝類は除き，原記載名は現行表記の平仮名で示した。
・イカ類：こぶしめ，するめいか，たちいか，はりいか，みみいか
・タコ類：たこぶね，まだこ，みずだこ
・甲殻類：えぼしがい，かめのて，やどかり，われから（良い図を付す）
・ヒトデ・クモヒトデ類：いとまきひとで，しわひとで（テヅルモヅル類の別称），たこのまくら（ヒトデの古名）
・ウニ類：がぜ（ウニの別称），ききょうがい（現カシパン類），くろがぜ（現ムラサキウニ？），ばふんがぜ（現バフンウニ），もみじがい
・ナマコ類：ふじなまこ・ふじこ（現フジナマコ）
・その他：あめふらし，い（ユムシ），うみうし，えらこ（ゴカイの仲間），かぶとがに（蟹ではない），しゃこ，鉄樹（ヤギの類），やぎ（花虫類），やむし

７　『椿花形附覚帳』

たまたま必要があって，18世紀頃の椿の花銘を調べたところ，国会図書館蔵『椿花形附覚帳』が重要な資料らしいと判明した。これは伊藤徳右衛門［注１］が天明８年（1788）７月に成稿した書物で，所収品数は160。各品が当時栽培されていたのか，先行資料からの集録かは記し

表４　『椿花形附覚帳』の花銘と同名の数と割合

資料名	①百花椿名よせ帖	②地錦抄	③古来椿名寄＊	④つばき名よせ色付	⑥花壇綱目（刊本）
全数	100	227	141	121	66
同品名の数	57	66	114	117	5
同品名の％	57％	29％	81％	97％	7％

＊「古来」と記された品名で，記文を伴う場合に限った。

ていないが，その花銘の多くが表４のように，①～⑤の資料に見られるのである。なお，『椿花形附覚帳』の全所収名は次頁の表５に示しておく。

①『百花椿名よせ色付』，伊藤伊兵衛（三之丞か政武か不明），折本，所収品数100，刊年未詳，東大総合図書館・田中文庫蔵：②より古いとの見解がある。

②『地錦抄』（伊藤伊兵衛三之丞『花壇地錦抄』／同政武『増補地錦抄』『広益地錦抄』『地錦抄附録』），元禄８年（1695）～享保18年（1733）刊，所収品数，計227：品数は八坂書房版総索引による。

③『古来椿名寄』，編者・成立年未詳，所収品数141，国会図書館蔵：古名の集録。

④『つばき名よせ色付』，編者未詳，文化９年（1812）成，所収品数121，国会図書館蔵。

⑤『椿名寄色付』：④の転写本だが，『椿花形附覚帳』由来の品が３点少ない，国会図書館蔵。

⑥『花壇綱目』刊本，水野元勝，天和元年（1681）刊，所収品数，66：より古い園芸書の例。

上表から明らかなように，資料①～④には，『椿花形附覚帳』（以下『覚帳』）と同じ名が高い割合で所収されている。なかでも，『古来椿名寄』は『覚帳』が主たる種本と推察されるし，『つばき名よせ色付』にいたっては，『覚帳』以外に由来する名はわずか４点だけで，『覚帳』の記文もそっくり写しており，その抄録と見なせる。

一方，総合園芸書の最初の刊本である『花壇綱目』には椿花銘66点が記されているが，『覚帳』と同じ名は僅か５点（７％）しかない。『椿花形附覚帳』中の名は古いようだが，大半が『花壇綱目』までは遡らない。

（注１）伊藤徳右衛門（代々襲名）は江戸・染井の人で，江戸時代初期には同地の名主だった家柄（東京市史稿・遊園篇第二）だが，著名な伊藤伊兵衛家との関係は不明である。

表５　『椿花形附覚帳』花銘一覧（五十音順）*

あい（間）の山
赤ともへ（巴）
飛鳥川
後とり染
あまが崎（尼崎）
嵐
あらら木
ある川
あわゆき
石ひ屋
いづみ川
い勢
いそ枕
いだてん
いちりん（一輪）
一休
いなづま
いなば
いもせ
岩清水
いはね
うすざくら
うす重
江戸星
大神楽（おおかぐら）
大波
大もみじ
おきつ
おきの波
おらんだ白
阿蘭陀紅
かぎり（限）
かこ嶋（鹿児島）
かしう
かすがの（春日野）
金杉三階
加平
鹿村
通ひかのこ
かよひ千鳥
から糸
からこ（唐子）
から崎
唐椿➡とうつばき
かりそめ
寒咲
菊さらさ
菊れんげ
行幸
銀玉
きんけい（金鶏）
金水引
口紅
くまさか
雲井
けんけう（見驚）
ごいし
高野山
ごけう
御所車
小町
さざれなミ
四海波
獅子
獅子吼
しののめ
しやむろ
ぢうりん（重輪）
白唐子
白ともへ（巴）
白まんやう（白万葉）
真くれない
すき屋（数寄屋）
関守
せつがう
染小袖
大ちりめん
大りん（大輪）
大れんげ
高砂
たかね（高根）
立田川
立波
たまがき（玉垣）
玉坂
玉だれ
玉手箱
太郎冠者
ちやうくわ
ちんくわ（珍花）
唐人
唐椿
とき白
とりどり
鳥の子
なか白
鳴戸（なると）
なんばん星
錦さらさ
錦絞り
登
白わう
白がん（白雁）
白ちんか（白珍花）
羽衣
はつせがいり
初花
花車
はや船
柊椿（ひいらぎ）
緋車
ひちりめん（緋縮緬）
ひとすぢ（一筋）
一休→いっきゅう
ひのれんげ
姫小袖
百いち
ぶさう（無双）
冬ごもり
古里
豊後絞
平吉
べにかのこ
紅くわひん
紅さらさ
紅しぼり
北斗十りん
卜伴（ぼくはん）
星緋車
星牡丹
子規（ほととぎす）
本間絞り
まきぎぬ
松かさ（松笠）
松嶋
松しま（上とは別）
まり唐子
みささぎ
乱（みだれ）かのこ
乱獅子
みどり
みなもと
三室山（みむろ山）
ミやまき
む蔵野
村雨（むらさめ）
むるい（無類）
もくちん花
もしほ
もみぢ
八重鹿村 **
八重白ふやう **
八重せつかう
八重松風
八代
ゆき平（行平）
横川
横雲
乱拍子（らん‥‥）
りうじん **
六角白
若草
和歌の浦
渡し守
侘助（わびすけ）

全160品

* （　）は読み／漢字表記：資料①～⑤を参考にした。
** 別名として付された名で，計数に入れなかった。

8　谷津家の和古書資料

谷津直秀先生（1877 ～ 1947，注１：注記➡77頁）は，江戸時代後期の博物家亀井協従の自筆著作が自家に伝わることを，『植物及動物』に「隠れた博物学者亀（キ）協従」と題して報告された（注２：以下では「谷津報文」と略する）。この資料は，御父上の直孝氏（1834 ～ 1907）が明治初頭に入手されたという。

私は，日本の動植物誌の歴史を調べはじめた1980年頃にこの報文を知り，やがて国会図書館や東京国立博物館で亀井の著作を見つけ，それを調べて「亀協従の著作」としてまとめた［注３］が，谷津家資料には当時出会えなかった。ところが，幸いにも2008年，その江戸時代資料の大半が谷津家に現存すると判明した［注４］ので，その大要をまとめておく。なお，以下は，敬称を略する。

亀井は江戸渋谷宮益（ミヤマス）町の名主で，本姓は源，名は協従，通称与右衛門，字重幸，号萬口亭。著作にはもっぱら「亀協従」を用いた。祖先が寛永11年（1634）に江戸の渋谷に住みつき，以来代々名主を勤めた［注５］。後述の『神仏人物像形写画』によれば協従は宝暦９年（1759）の生まれで，狩野派の画家に絵を学んだらしい。その画才を見込まれて，寛政12年（1800）には幕臣金沢瀬兵衛の北越巡見に同行して描画を担当，『北越物産写真』を残す（➡注３）。ローマ字の自印があるので，蘭語にも関心を抱いていた。没年は未詳だが，文化５年（1808）から文政12年（1829）の間である［注６］。

谷津家には，下記の亀井協従旧蔵書ほかの和古書が残っている［注７］。

①　『動物図説』，亀井協従自筆，４冊
②　『草類図説』，亀井協従自筆，13冊
③　『樹木図説』，亀井協従自筆本の転写，３冊
④　『鯨属全形之図』，一洗斎転写・亀井協従再転写本，折帖１冊の表側貼り込み
⑤　『各種模写集』，亀井協従模写，折帖７冊
⑥　『物産画稿』，疎竹園画？，亀井協従旧蔵，１冊

以下，この順で各資料の概要を紹介するが，①～③については，注意を要する点が幾つかある――ⓐ上記①～③の書名は亀井の命名ではなく，いずれも明治期に付されたものである，ⓑ本文の図は亀井協従の描いたものだが，記文（解説文）は江戸時代の博物書の転写が大半を占める，ⓒ谷津直孝が明治期に追加した資料が含まれる，ⓓ江戸期の分類［注８］を近代生物学による分類で配列を組み換え，目次もそれに沿って明治期に付されている。

⑴『動物図説』：亀井協従自筆本，全４冊，半紙本・袋綴［注９］。

各冊の表紙には「獣」「禽」などの題のほかに「江西人亀協従　自画撰」，裏表紙には成稿時と思われる年記が記されており，寛政11年（1799）～享和元年（1801）頃の作成である。次頁の表６に構成の大要を示すが，爬虫類・豸虫（チチユウ）類（現在の両生類）・甲殻類・軟体動物のグループは，明治期に谷津直孝がまとめたもの。品数は計297品で，うち18点は明治期の追加。

表 6　『動物図説』の構成

冊次	表紙（原題）	裏表紙（成稿年か）	類別	品数 *
冊 1	獣一	記ナシ	獣類	27（6）
冊 2	禽二	寛政十一（1799）己未暦秋	禽類	59（4）
			爬虫類 **	10（3）
			豸虫類 **	7（1）
冊 3	魚三	享和元（1801）辛酉暦夏	魚類	56（4）
冊 4	虫四	享和元（1801）辛酉暦夏	昆虫・クモ **	85（0）
			甲殻類 **	12（0）
			軟体動物 **	30（0）
			その他	11（0）
合計				297（18）

* 品数欄は初めに全数を記し，そのうち明治期に加えられた数を（　）内に示した。
** 谷津直孝が分類し直したグループ。豸虫類は現在の両生類。

『動物図説』で興味深い記述をいくつか取り上げておく。《明治》は明治期の追加。

①霊猫（ジャコウネコ）の写生図：「医学館多紀永寿院法眼，於薬品会，寛政七年［1895］歳次乙卯五月十九日，江西渋谷人亀協従写之」。「幕医の多紀元徳（永寿院）が寛政 6 年に蘭館から買い取ったジャコウネコを飼育したが，寛政 8 年に死んだ」と他書に記述がある。しかし，それを幕府医学館の薬品会（各種資料の展示会）に出品していたことは，従来知られていなかった。この記述は，亀井が幕府医学館の薬品会なども参観していた証拠ともなる。

②モルモットの図：御用伺絵［注10］の一つで，『唐蘭船持渡鳥獣之図』［注11］に同一図があり，天保14年（1843）に初渡来したモルモットである。図には「豚鼠」の名と「テンヂクネズミ，俗マルモツトと称」とあるが，「テンジクネズミ」(天竺鼠）の名称は慶応元年（1865）に作られた［注12］ので，この記文はその後に追加したものである。《明治》

③享保14年（1729）以来130余年ぶりに江戸に来た象の見世物の錦絵，文久 3 年（1863）晩春の作である。《明治》

④「海獺（ウミオソ）図　文化四丁卯暦［1807］十一月廿七日，高輪北町海岸来，里俗捕之，入上覧也‥‥」：おそらくアシカ。当時は時々江戸湾や相模湾に迷い込んでいた。とりわけ，品川で捕えられ，将軍家斉（イエナリ）も一見した本件はよく知られている。

⑤『動物図説』の禽類部には，御用伺絵の転写図が多い。「卯阿蘭陀船，紅音呼［ルイチガイショウジョウインコ］」，「卯拾七番唐船，鷓鴣（シヤコ）［ヌマウズラ］」，「卯拾七番唐船，硃砂鳥（シユシヤ）［アカマシコ雌雄］」などがそれで，いずれも，御用伺絵を集成した『外国産鳥之図』（『舶来鳥獣図誌』に所収，➡注11）の図と同じ。ほかに，フウチョウ（風鳥，剥製），コウライウグイス，ヤツガシラ，コウライキジ，ガビチョウ，ソウシチョウ（相思鳥），ヒクイドリ（火

食鳥），ダンドクなどの図もある。《一部は明治》

⑥『動物図説』には，明治初年に博物局（現東京国立博物館の前身）が出版した『博物局動物図』［注13］の貼込みも数多く含まれる。ヤマアラシ，サイ，アシカ，セイウチ，ヤマドリ，オシドリ，クジャク，オサガメ，アサノハガメ，オオサンショウウオ，ウチワフグ，マンボウ，シビレエイがそれである。《明治》

⑦延享元年（1744）10月に薩摩国硫黄島洋上で捕らえた「鼉竜（ダリヨウ）（加以未武）」（カイマン，現イリエワニらしい）に関する薩摩藩医曽占春の文（甲寅之春＝寛政６年＝1794執筆）と図：これはワニ漂着例の一つとして知られている。「寛政12年［1800］にも同じ種類を捕えた」とも記す。

⑧オオサンショウウオ図，「享和元年［1801］六月十二日，板橋宿水車之堀ニテ捕之。同十五日，於営中，入上覧」：当時名高い出来事で，将軍家斉も見物したとあって，一枚刷も何種類か刷られた。おそらく，その一つの写し。

⑨ランチュウ（金魚）の図：ランチュウは18世紀前半に作出されたといわれ，当時のランチュウには小さな背鰭が残っている。ところが，本図（３匹）の個体には鰭が無く，改良が進んだことを示す。白いランチュウも図示するが，白い個体は稀。

⑩「鱧（レイ）魚‥‥文化甲子［元年＝1804］六月五日，崎奥鎮台［長崎奉行］豊後守，所上進始儀来十余頭，今存活者七頭‥‥」：鱧魚は中国産淡水魚のタイワンドジョウで，七星魚ともいわれ，江戸時代には時々持ち渡られた。このときは生きたまま江戸に運ばれたので，将軍家斉も一覧した有名な一件。

⑵『草類図説』：亀井協従自筆本，全13冊，半紙本・袋綴じ

『動物図説』と同じく，各冊の表紙には「草　春之部」などの題のほかに「江西人亀協従撰」，裏表紙には年記が記されており，寛政７～11年（1795～99）および文化元年（1804）に成稿しているので，『動物図説』と平行して作成されたとわかる。図は亀井自身の描いたものと思われるが，残念ながら採集地や採集・写生年月日の記載はまったく無い。記文は小野蘭山［注14］の講義筆記『蘭山記聞』の写しが多く，同じく蘭山の著作『花彙』の引用も見られるが，亀井自身の観察記事は無い。明治期の追加記事はさほど多くない（50ほど）が，大半は雑誌からの抜書きで，『農業雑誌』や伊藤圭介の『花史雑記』が目立つ［注15］。

表紙の題から原本は春・夏・秋と開花期別に分かれていたようだが，谷津直孝はそれをリンネの分類［注16］に組み換えた。目次はすべてリンネ式分類に基いて明治期に作成したもので，原本の目録ではない。

『草類図説』の構成を表７に示しておくが，記載全数は1400に近い。この数でみると，岩崎灌園著『本草図譜』の2920品（木類も含む）や，飯沼慾斎著『草木図説・草部』約1200品に匹敵する。亀井協従著『草類図説』は，所収数で判断するかぎり，江戸時代では屈指の草類図説の一つと言えるだろう。

ただ残念なことに，採集した地名と年月日がまったく記されていない。亀井協従は渋谷の名

表７　『草類図説』の構成*

冊次	原本巻次	原本四季	裏表紙の記載	見出品数	所収全数	リンネ式分類
冊１	一	春	寛政　八・丙辰・秋	47	77	１綱１目～ ４綱４目
冊２	二	秋	寛政　七・乙卯・秋	74	167	５綱１目～ ５綱２目
冊３	三	春	寛政　八・丙辰・夏	53	105	５綱２目～ ６綱１目
冊４	四	秋	寛政　九・丁巳・秋	65	124	６綱１目～10綱５目
冊５	五	夏	寛政　九・丁巳・春	47	90	11綱１目～13綱７目
冊６	六	夏	寛政　八・丙辰・春	57	119	14綱１目～17綱３目
冊７	七	夏	寛政　九・丁巳・夏	41	89	17綱１目～17綱３目
冊８	八	夏	寛政十一・己未・春	41	96	19綱１目
冊９	九	秋	寛政　十・戊午・春	50	102	19綱２目～20綱１目
冊10	十	秋	寛政　十・戊午・夏	44	98	20綱７目～23綱１目
冊11	十一	春	寛政　十・戊午・夏	74	190	藻・羊歯・石松・禾本‥‥
冊12	十二	？	寛政十一・己未・？	56	70	鳶尾・蘭・睡蓮・蘇鉄‥‥
冊13		菌	文化　元・甲子・秋	21	46	キノコ（食用菌）
総計				670	1373	

* 品数は目録による。

主だったので，その近辺（たとえば，現在の広尾辺や新宿辺は採集の適地だった）で得たものが多いと思うが，確証は無い。また，記文の大半が他書の引用で，自身の観察によるものではないのが惜しまれる。『北越物産写真』（国会図書館蔵，注３）では，協従自身の筆で詳しい観察記録を残しており，力量のある人物だったのだが‥‥。

⑶『樹木図説』：亀井協従著原本の転写本，全４冊，半紙本・袋綴じ

他の谷津家蔵亀井本と異なり，本資料だけは転写本である。じつは，もと谷津家には亀井の作成した原本（５冊）があった。谷津報文によると――

「1879年［明治12年］に地理局山林課［のち山林局］で，複写の目的で借用を懇請して来た。それ故父［谷津直孝］が何気なく原本を借（ママ）した所が，複写を終るや，画工は不徳にも原本を売却してしまつた。山林課では大に驚き恐縮し，百方捜索に力（ツト）めたが，‥‥全然不明である。山林課では複写をまた複写して父に贈つて来たのが，現今私の所有に帰してゐる。私は原本を見たことはないが，草類図説とこの複写図と比較するに，これは遥（ハルカ）に拙劣である。当時丸の内山下町［現帝国ホテル辺］にあつた博物局では，山林課に依嘱して，複写本をまた複写してもらつた。これが現今は帝室博物舘［注17］に保存してある」

ややこしい話なので，図で示すと次頁のようになる。枠内は原本・各写本の題名と冊数である。

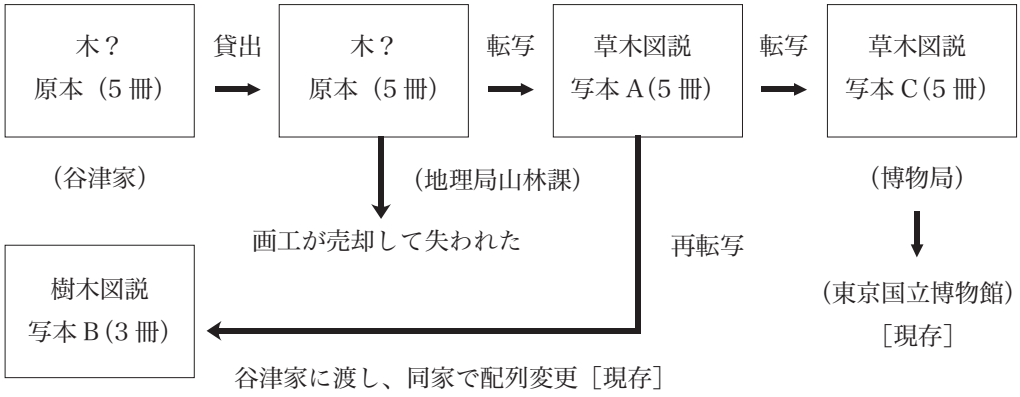

表 8　『樹木図説』（写本 B）

冊次	品数	類品数 *	合計
冊 1	72	68	140
冊 2	96	97	193
冊 3	39	27	66
合計	207	192	399

* 各品の記文に名が出る類品の数。右表の写本 C では判別しにくいことが多く，数えていない。

表 9　『草木図説』（写本 C）

冊次	目録の記載	品数
冊 1	春木四十三種	43
冊 2	木	32
冊 3	秋木五十種	47
冊 4	木	29
冊 5	秋木三十三種	34
合計		185*

* 品数の合計185は左表の207に対応するが，明治期の追加などにより差が生じた。

こうして，谷津直孝は転写本を受取り，配列を変更して 3 冊にまとめ，書名も『樹木図説』と変えた。この現存本の構成を表 8 に示す。図は転写した画家の能力が劣っていたらしく，『草類図説』より出来が悪い。記文は『草類図説』と同じく『蘭山記聞』や『花彙』の写しが多い。なお，原本の面影を残す写本 C は開花期・結実期を基準とする配列（表 9）だが，谷津家の写本 B の配列は山林局出版の樹木誌に従っている（写本 C の小野職愨（モトヨシ）識語による）。

不思議なことが一つある。表 9 から明らかなように写本 C は春木と秋木だけで，「夏木」と「冬木」が無いのである。季節別に品を配列した資料で冬の項を設けないのは時々見られるが，さまざまな花が咲く夏の項を欠くのは奇妙である。

じつは国会図書館に，亀井協従著『夏木譜』という資料が残されている。これはアオギリ・クサギ・クチナシ・ナツツバキ・ナツミカン・ビワ・ムクゲなど，30品を収める彩色図譜で，体裁は『樹木図説』や東博蔵『草木図説』とよく似ている。そこで，『夏木譜』所収品と写本 B・C の所収品が重複しているか否か調べてみたところ，『夏木譜』の30品すべてに重複が認められない。

まったく重複しないということは，『夏木譜』が元は現『樹木図説』の一冊だったとすれば，

説明がつく。いつ頃，どのような事情で離れ本になったかはわからないが，谷津直孝が木部原本を入手したときは，すでに失われていたのだろう。もっとも，筆跡を谷津家の『草類図説』などの自筆本と比較したところ，この国会図書館本は自筆本ではなく，転写本らしい。

⑷『鯨属全形之図』：一洗斎転写・亀井協従再転写本，折帖１冊［注18］。

表紙には「南紀一洗斉（ママ）潤山校正（文化四／丁卯冬）／鯨属全形之図／武陽渋谷人亀協従写蔵」とあり，序文を一洗斉潤山が記す。そのなかで，捕鯨基地40余の地名を挙げる。

本文は以下の①～⑦の７部から構成されている（［　］内は現和名）。

①「六鯨之図」：「六鯨」は江戸時代に本物の「鯨」とされていた６種類，すなわち「背美鯨［セミクジラ］・座頭鯨［ザトウクジラ］・児鯨［コククジラ，チゴクジラ］・長須鯨［ナガスクジラ］・まつこ鯨［マッコウクジラ］・鰹鯨［イワシクジラ・カツオクジラ］」の品名・図・記文（特徴など）を記す。記文は『鯨志』（梶取屋次右衛門著，宝暦10年＝1760刊：漢文）の和訳。

②上記以外の種類（イルカ類のみ）：「しやち［サカマタ］・いるか［マイルカ］・くろ・大魚喰（オオウオクイ）・ごと」の５品の品名・図・記文。

③鯨猟用漁具の図。

④鯨の形態的・生態的特徴など（文のみ）。

⑤鯨の薬効：『鯨志』の和訳など。

⑥「紀州熊野浦・突鯨之図」：末尾に「文化四年丁卯春　校正　一洗斉」とある。

⑦鯨の解剖図＋クジラガキ図［注19］：１枚，明治26年３月に他の鯨譜から写した旨の書き入れがあるので，明治期の追加。

図の形状と品名から，将軍家綱時代（1651～80）に幕府の命で描かれた鯨類図譜の系統に間違いない［注20］。太地（タイチ）頼徳（おそらく熊野太地村の人）が上記①②の計11種類および③⑥の図を描いたとされ，江戸時代の鯨譜諸系統のうち，図がもっとも優れている［注21］。一方，④⑤は転写の過程での追加と思われる。また，⑦は別系統の鯨譜からの追加である。

谷津家資料は，南紀（上記太地や，その周辺）の一洗斉（斎？）潤山が文化４年（1807）冬に転写した図譜を，亀井協従が再転写したと解釈してよいだろう。多少の虫食いが見られるが，概して保存状態は良い。江戸時代作成の鯨譜は多いが，そのなかの優品の一つ。

⑸『各種模写集』：亀井協従模写，折帖（28×20cm），７冊

この７冊はすべて折帖で，よく似た体裁の資料である。亀井青少年時代の模写が主体なので，総合して「各種模写集」と呼ぶことにする。ただし，⑦は実写である。

いずれも，見返し（表紙の裏）に詳細が記されており，本文では１頁または見開き２頁に彩色図・墨絵・線画を描く。大半は亀井が青少年時代に既成の画（狩野派が多い）を模写したものと思われるが，図は優れている。裏表紙には，記載が無い。

以下に，それぞれの帖の概要を記すが，表紙と見返しで書名が異なる場合には，後者に拠っ

た。

①「神仏人物像形写画」：天照大神・日本武尊・柿本人麻呂・三十六歌仙などを描き，三十六歌仙図の末尾には，「右三十六歌仙　土佐光輔筆／安永二癸巳暦九月　源重幸十五歳写之」とある。この記述から，亀井協従の本姓が源，名が重幸であること，安永２年（1773）に15歳ならば，宝暦９年（1759）の生まれであることがわかる。

②「和漢人物真行草図」：孔子・楊貴妃・黄帝・神農・鍾奇・七福神・文殊菩薩などを描く。

③「和漢禽獣草木写図　上」：前半には獣が，後半には植物と鳥・魚が入り交じって描かれている。ボタンの図に「天明二壬寅八月十七日，写之」とあり，天明２年（1782）には，亀井協従は24歳。

④「和漢禽獣草木写図　下」：③の継続らしいが，虫食いがひどくて開けず，詳細不明。

⑤「本邦峯川風景摸図」：風景画，虫食いがひどく，詳細は不明。

⑥「泰西画摸図」：洋画の模写，人物・動植物さまざま。この題だけは谷津直秀の命名（➡谷津報文）で，表紙題箋も谷津筆。見返しは『解体新書』扉絵の模写だが，欧字はすべて省かれている。人物画の出来はやや劣る。雪片の顕微鏡図を模写した図が１枚ある。

⑦「蛮国花布染形摸図」：ジャワ更紗（サラサ）の模様を写生・編集した。見返しに「天明改元辛丑暦仲秋旦」，青山蒲阪圓という人物の序文末尾に「‥‥友人亀氏，善画花布随摸写逐輯為冊，以便尓擬造者，今余序之，戊辰［文化５年］孟春日」とあり，天明元年（1781），亀井協従23歳の８月に作成し始め，文化５年（1808），50歳のときには完成していたと考えられる。彩色図も無彩の線画もあり，出来に精粗はあるが，興味深い一冊。

⑹『物産画稿』：疎竹園画？，亀井協従旧蔵，半紙本・袋綴

表紙に「物産画稿　江西人亀協従蔵」，裏表紙に「疎竹園」と記す。動植物の線画集で，細部を細かく描いているが，着色はごく一部に限られる。「疎竹園」が亀井協従の号か，どうかは不明だが，表紙に「亀協従蔵」と「蔵」の字をわざわざ入れているのは『鯨属全形之図』と本書だけであり，描画したのは亀井ではなく，別人「疎竹園」ではないかと思う。

［注１］谷津直秀は明治33年（1900）に東京帝国大学理科大学（東京大学理学部の前身）動物学科を卒業，のち同学科教授。日本の動物学に実験的手法を導入したことで知られる。

［注２］谷津直秀，隠れた博物学者亀協従，植物及動物，８巻７号：谷津には多数の著作があるが，和古書については本報文が唯一の報告である。

［注３］磯野直秀，亀協従の著作，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，27号。

［注４］谷津直秀先生は，昭和６年（1931）と同10年にヨーロッパに旅されて，昭和18年（1943）に特色ある紀行文『生物紀行　前編』を三省堂から出版された。第二次世界大戦が終わった頃には後編の原稿も完成していたのだが，戦後の大混乱で出版がままならないうち，昭和22年（1947）に世を去られた。山田真弓北海道大学名誉教授はその原稿を長いあいだ探しておられたが，ようやく2008年の春に谷津先生の御子孫の所在

を突き止められ，原稿も現存することが判明した。そして，その余沢として，亀協従関係の古書も谷津家に保存されていることがわかったのである。なお，『生物紀行』は前後編を併せて，近く刊行される予定である。

［注５］「渋谷宮益町名主与右衛門書上由緒」，『渋谷区史』，渋谷区役所編・刊，1952年：亀井協従の子息が文政12年（1829）に記した由緒書で，注３報文に所収。亀井家は，代々与右衛門を名乗っていた。

［注６］『蛮国花布染形摸図』［➡⑸『各種模写集』⑦］に文化５年（1808）の序があり，文政12年（1829）執筆の注５資料に，「亡父与右衛門」と記されている。

［注７］この他に，『普通動物学』などの明治10年代教科書や，博物局編『教草（オシエグサ）』などが残っているが，和古書ではないので，本稿では取り上げない。

［注８］動物の場合，江戸時代の日本でよく使われたのは次の５類に大別する方法だった（当時の人々は定義をしないので，諸本をもとに作成したもの）。

獣類＝四つ足で，毛をもつ。

禽類＝昆虫以外で翼をもつ：コウモリ・ムササビを含めることもある。

魚類＝水中を泳ぐ：クジラ・(エビ)・クラゲなどを含む。

介類＝水中で生活し，殻をもつ：貝類のほか，カメ・カニ・(エビ)・ウニ・石サンゴなど。

虫類＝上の４者以外：昆虫・クモ・トカゲ・ヘビ・カエル・サンショウウオ・ヒトデ・ナマコ・カタツムリなど。

植物の場合は，①草類・木類に大別するか，形態的に明確な竹類・シダ類・コケ類・キノコ類を別扱いする。あるいは，②『本草綱目』にならって，「山草・芳草・湿草・毒草・蔓草・水草‥‥穀類・菜類・果類・木類」のように，形態・生態・用途などを組合せて細かく分ける。

［注９］半紙本は半紙を二つ折にして折り目の反対側を綴じた書物で，現在のＢ５判よりやや小さい。また，このような綴じ方を「袋綴」という。

［注10］長崎に珍禽異獣が到来すると，高木家（御用物役）は御用絵師に精密な絵を描かせて幕府に送り，御用の有無を伺った。その絵を磯野は「御用伺絵」と呼ぶ。珍禽異獣の図なので数多く転写され，木版画一枚刷「長崎絵」として作成・市販した例もある。

［注11］御用伺絵の集成で，『舶来鳥獣図誌』（磯野直秀・内田康夫編著，八坂書房）に所収。

［注12］田中芳男，「マルモット考」，同編『物産宝庫』（東大総合図書館，国会図書館所蔵）に所収。

［注13］『博物局動物図』：明治５～12年（1872～79）に博物局が出版した木版色刷の一枚刷で，全24点が刊行された。

［注14］小野蘭山（1729～1810）は京都の人，半世紀近く私塾衆芳軒で本草学・博物誌を講義して名声を得たのち，幕府に招かれて寛政11年（1799）に江戸へ移る。当時もっとも名高い博物家で，多数の講義録が伝わる。『蘭山記聞』はその一つ。

［注15］伊藤圭介（1803 ～ 1901）は文政末期～明治前半に活躍した名古屋出身の博物家で，日本最初の理学博士。『花史雑記』は『東京学士会院雑誌』に長いあいだ連載された植物誌である。圭介は『泰西本草名疏』（1829刊）で，リンネ式分類（➡注16）を日本で初めて紹介したことでも知られる。

［注16］リンネの分類は，オシベの数や形状で植物を24「綱」に分け，各綱をさらにメシベの数などで幾つかの「目」に分ける。オシベ・メシベの数を用いるので，「自然分類」と呼ぶ人がいるが誤り。この方式は検索のための「人為分類」であって，系統関係に基く「自然分類」ではない。

［注17］博物局は，のちに帝国博物舘，ついで帝室博物舘と名を変え，第二次大戦後に現在の東京国立博物館となった。今もその資料館には博物局時代の資料が多数残る。

［注18］折帖は，貼り継いだ紙を屏風のように折り畳んだ本。表裏両面を使用できる。

［注19］クジラガキは，クジラ類の皮膚に着生するフジツボ。

［注20］磯野直秀，江戸時代鯨類図説考，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，16号／日本博物学史覚え書10，同前，29号，39 ～ 40頁：前者は総論，後者は本稿に記した家綱時代作成の『熊野浦鯨魚図』についての報告である。

［注21］『鯨属全形之図』の序文にも，「今茲（ココ）に著す図は，熊野突鯨の長（オサ）なる太地角右衛門に需（モト）め得て写す」と記されている。

謝　辞

本研究に当たって，雑花（ソウカ）園文庫の小笠原亮軒氏は『嘉卉園随筆』ならびに『草花名寄帳』のコピーを，河村典久氏は『丹波修治先生伝』の翻刻版を提供してくださり，重井陸夫氏にはウニの同定でお世話になりました。また，第２ ～ ４節の長谷川 仁先生旧蔵書の使用については，前報（➡第２節・注１）で記したように先生の御子息長谷川 幹氏の御諒承を得ました。一方，山田真弓先生が谷津家を初めて訪問されるときに私を誘ってくださった御陰で，谷津家の和古書に出会うことができました。谷津直和氏にはその谷津家所蔵和古書類の閲覧・撮影・公表をお許しいただきました。この場を借りて，皆様に心から御礼を申し上げます。